

令和元年度 鳥取県立農業大学校評価システムシート (第2回)

ミッション	時代の農業を担い、指導的役割を果たす人材の育成・確保
重点目標	○学生・研修生の円滑な就農の支援 (個別指導の強化及び関係機関との連携による自営就農及び雇用就農の支援強化) ○GLOBAL G.A.P.の実践と日本梨の認証継続と白ネギの新規認証取得

評価基準 (達成度)

- A 100%以上達成
- B 80~99%達成
- C 60~79%達成
- D 40~59%達成
- E 39%以下の達成

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
1	着実な就農	1 求人・求職者情報の就農支援関係機関との共有による就農の促進	1 近年、非農家出身学生が約5割を占める中、農業法人等からも求人が増えており、雇用就農による就農が増えている。 <年次別就農率> H26:80%、H27:61%、 H28:70%、H29:67%、 H30:59% (5か年平均67.4%)	1 学生の就農率67%	1 就農支援関係機関との情報(求人、求職、研修)共有 ・雇用就農相談会による農業法人等求人者および求職者のマッチング ・県内地元就農を目指す学生の就農地農業関係機関との意見交換会の開催	1 農業改良普及所、担い手機構等との情報共有を随時実施他。 ・雇用就農相談会を2回開催し(7月、11月)、求人者52名、求職者99名(うち農大以外の参加3名)が参加した。それにより2年生、研修生5名の就職が内定し、1年生は自身の就農イメージを具体化することができた。 <学生就農率65%(11/17)> ・親元就農2名、雇用就農後独立就農希望1名について、卒業後の就農がスムーズに進むよう関係機関との顔合わせ、意見交換等を行った。	B		・農大卒業生で農協営農センターの指導課長として相当の販売額を背負い、活躍している。そういう卒業生もいる。就農だけでなく、就職の支援も引き続きお願いする。 ・就農者の中に雇用就農がカウントされること疑問を持つ。経営者となるものが就農者ではないか。
		2 研修生に対する確かな進路指導の実施	2 社会人向け研修制度として運営している各種研修制度の趣旨はそれぞれ異なり、研修生の受講目的も様々である。就農実現に向けては、制度ごとに研修生のめざす目標を踏まえつつ、個々の背景やレベルに即した指導及びアドバイス、研修進捗状況をおさえながらタイムリーに関係機関との調整を実施していくことが極めて重要である。	2 ･アグリチャレンジ研修生の就農率:70% ・先進農家実践研修生・スキルアップ研修生のうち自身の経営計画作成率(修了時):80%	2 各研修において、研修開始時・終了時のみならず、研修期間中の個別面談等を複数回実施しながら、各研修生に適した進路・就農方針に関するアドバイス、必要な関係機関との調整を実施する。	2 研修生個々の目指す就農形態が異なるため、個別面談を重ね、支援方針を決定した。また、関係機関との支援方針の共有を図るとともに打合せを行い、就農支援した。 <評価指標達成状況> ・アグリチャレンジ研修生の就農率80%。 ・先進農家実践研修、スキルアップ研修修了時の営農計画作成率100%見込み。	A		
2	学生・研修生の確保	1 農業大学校の魅力発信	1 養成課程入学生数は平成23年度以降、定員割れが続いている。 ・入学者の志願のきっかけに「HPを見て」の声が多いため、その充実が必要である。 <入学者数の推移> H27:23名、H28:21名、H29:22名、H30:24名、H31:24名)	1 入学者数 定員30名確保	1 オープンキャンパス(2回)の開催、学校ホームページの更新による魅力発信 ・高等学校進路指導研究会への参加および県内高校訪問(全校) ・各高校で実施の進路ガイダンスへの参加 ・高校生の職業観の醸成と農業分野への進路選択の機会提供	1 オープンキャンパスを2回開催し26名が参加(うち県内出身者16名、3年生17名、入学予定者14名)。 ・学校HPにおいて専攻実習等学生の日常生活等の更新を随時行い、学校の様子の公開に努めた。 ・県内の全高校を訪問し、学校説明を行うとともに、入学志願者の情報収集を行うとともに高校進路指導研究会に参加し、学校PRを行った。 ・鳥取湖陵2回、智頭農林1回、倉農1回、日野1回が行う上級学校訪問を受け入れ、学校説明。 ・5高校の進路ガイダンスに参加し、学校説明。 ・昨年度に引き続き私立学校協会と連携し、専門学校進学フェアに参加した。 <令和2年度入学予定者23名> 二次募集入試3/20	C	・オープンキャンパスの開催日の周知を徹底し(5月~)、参加者を確保する。 ・HPの更新頻度を上げ、学校生活を一層アピールする。	・学生の確保が一番の課題。入学者の状況により農場実習の運営への影響が大きい。
		2 農業高校との連携による学生確保	2 農業高校3校(智頭農林、鳥取湖陵、倉農)の農業クラブをオープンキャンパス時に受入れ、3校出身の本学生との交流会を行っている。 <年次別参加者> H26:11名、H27:13名、H28:12名、H29:10名、H30:12名 ・スーパー農林水産業士を志向する生徒の食の6次産業化プロデューサー育成講座への受入を行っている。 <年次別受講者数> H29:52名、H30:39名	2 ･オープンキャンパスと農業高校の農業クラブの同時開催による先輩学生との交流 ・農高生対象の就農イメージ相談会の開催 ・農業高校教員の内地留学研修の受入れによる農高生の農大進学動機付けと農大指導職員の教育力向上 ・スーパー農林水産業士に係る食プロ育成講座受講受入れ ・農業教育研究会(教育委員会)での学校紹介および情報交換	2 農業高校3校の農業クラブ員6名と各高校OBの農大生11名との交流会を行い、農大の理解を深めた。 ・農高生を対象とする就農イメージ相談会はスケジュール調整ができず、開催できなかった。 ・農業高校教員の内地留学研修は31年度以降中止。 ・スーパー農林水産業士認定要件である職の6次産業化育成講座を46名(3校)が受講し、3年生4名(2校)がスーパー農林水産業士(農業部門)に認定された。そのうち1名が令和2年度入学予定(野菜コース)。 ・農業教育研究会の開催はなかった。 ・「魅力ある講義の進め方」について、倉農校授業を参観し、意見交換するなど倉農校との交流を行った(11/19)。				
		3 IJUターン就農者の掘り起こし	3 東京、大阪で開催される移住フェア、新農業人フェアに参加し、就農を目指す一般社会人が事前に進路相談できる機会を提供し、相談に応じられている。	3 東京(3回)・大阪(4回)等での就農相談会を通じて就農のための道筋や支援制度の紹介し、就農希望者の掘り起こしを行う。	3 移住フェア、新農業人フェア、IJUターン相談会等に参加し(東京5回、大阪4回)、就農希望者の相談に応じた。 ・相談者が就農を目指し、アグリチャレンジ科に入校し、機械操作等の研修を受講。 平成30年相談者5名(令和元年) 令和元年相談者2名(R2予定)				

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言		
3	学生の総合的経営能力の向上	1 学生個々の状況に応じた個別指導の充実	【養成課程共通】 1 学生の就農意欲や体力、学力は千差万別で、専攻実習での技術習得には個々の能力・スピードに応じたきめ細やかな指導が必要である。	1	1 各コース毎に「理解度アンケート」を実施し、農業技能や農作業安全に対する知識の習得状況について学生と職員の共通認識を図る。学生の苦手分野の克服、作業時間を含むコスト意識を醸成するための指標として活用する。理解度アンケートの実施（7月、11月の2回）とそれを基にした個別指導（随時）	1 「理解度アンケート」により判定した知識・技能の理解度、習熟度を基に、面談、指導により、技能習熟度が向上した。また、理解度アンケートの評価方法を4段階評価に統一した。 ・理解度アンケート実施(7月、12月ほか) (詳細は各コースごとに記載)			・コースにより理解度アンケートの評価法が異なる。同じモノサシで共通的に評価できるようにした方がいい。 ・理解度アンケートが非常に謙虚に回答されているように感じる。もっと良い評価ではないかと思う。		
		2 計算能力を含めた基礎学力の向上	2 営農技術のなかには、圃場面積の計算、施肥量の決定や農薬の希釈など、計算能力が求められるが正確に計算できる学生が少ない。	2	・1年生学力補完補講座（合格水準達成率向上：20%→100%）	2 ・24名中19名の学生に対し学力補完講座を22回実施した。 ＜合格水準達成率＞20%(6/3)→95% ・各コースの農場実習(肥料、農薬、種子等散布)により実践力を磨いている。	B		・農薬や肥料の計算間違いはコストに直結する。		
		3 幅広い農業知識の習得と販売実習による経営感覚の向上	3 多様化する農業形態の中で営農するために、コースの枠を超えて幅広い知識と技術を身につける必要がある。またモノを作るだけでなく、「売る」ことも意識させることで経営感覚を持った農業者を育成する必要がある。	3	3 「校内技術競技」を行い、各コースから出題される問題（筆記・実物鑑定）を解きその点数を競う。また校外で「農大市」を実施し、商品PR方法などを学ぶ。対面販売を行うことで消費者ニーズを把握するとともに、接客方法を学び、生産販売に活かす。農大市終了後にアンケートを実施する。	3 ・校内技術競技の開催(6/19、11/7) ・1、2年生と一緒に事前勉強するコースも見られ、学習意欲の向上につながっている。 ・農大市や修農祭において、ポップに工夫をし、商品PRに努めるとともに、普段人見知りの学生も含め積極的に接客した。 ・農大市や修農祭におけるPR活動に積極的に取り組みようになった。 ・農大市(校内3回：7/11、9/12、12/11、校外4回：6/22-23、8/24、9/28、10/12) ・修農祭(11/23) ・各コースにおいて、生産物販売を通して、コストや損益分岐点を計算させ、単価設定をさせた。 ・農大市(校内)終了後、毎回反省会を行い、良かった点、改善が必要な点を拾い出し、次の開催に反映させた。					
		4 地域で頑張っている卒業生等を訪問して自己の就農意欲を高める	4 非農家出身の学生割合が高くなってきていることから、地域で頑張っている農業者等を訪問し、就農・農業法人就職等に向けた意識付けが必要である。	4	4 農家・卒業生等の訪問・視察（各コース2回以上）	4 農家・卒業生等の訪問・視察 合計18回：果樹2、野菜6、花き4、作物3、畜産3 ・学生が具体的な進路や就農のイメージを持つことができるようになった。 ・自分の目指す就農に必要な資格を知り、フォークリフト、車両系建設機械運転技能等の資格を取得した。					
		5 GAPに関する講義の継続及びH31認証の継続取得	5 近年、農業のグローバル化や食の安全意識が高まっており、生産工程を管理する手法（GAP）の教育が必要となっている。	5	5 ・GAP認証の継続取得（日本梨）及び新規取得（白ネギ）	5 ・グローバルGAPに特化した講義について1年生を対象に年8回実施 ・各コースで改善取組を行う。 ・この学習の成果目標として、「日本梨」での認証の継続取得及び「白ネギ」での新規認証取得を目標とする。	5 ・GAP普及推進機構から専門家を招き、グローバルGAPの理念から具体的なリスク評価、手順書の作成方法等に至るまで講義・演習・ワークショップを実施した（6/14～1/10、8回）。 ・講義を通じ、当たり前のできていなかったこと、同じことの繰り返しを怠らず続けることの大切さ、整理整頓の大切さ、表示の大切さなどへの意識が高まった。 ・全コースで整理整頓や掲示（見える化）に取り組んだ。（詳細は各コースに掲載） ・果樹コースの学生を中心に「日本梨」での認証審査を受け、GLOBALG.A.P.認証を継続取得した（1月29日付）。 ・白ネギでの新規認証取得は、予算の都合上、不可能となったが、学生の意欲向上を図るために模擬審査を実施した。その結果、改善すべき事項が明らかとなり、来年度の審査に向けて取り組むべき内容が明確となった。	A		・非常に良い取組。特にこの学校の時期に取り組むことに意義がある。年齢が進んでからは片付けなどできなくなる。	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
4	学生の専攻 営農技術の 向上	【果樹】 1 ほ場管理に係る主体性、責任感の醸成	1 永年作物である果樹の栽培技術を2年間の限られた期間で習得する事は困難である。よって、技術習得を図るためには、学生が主体的に責任感を持ってほ場管理を行わせる必要がある。	1 「1,2年共通」 理解度アンケートでほ場作物の管理等に関する項目について、職員評価で「できる」以上が80%以上 「2年次」 ・作業説明の評価として学習チェックの活用	1 「1,2年共通」 ・1人に1樹「1人」二十世紀の担当樹を割り当て、年間を通して栽培管理を行わせる。 ・梨等の栽培管理に関する基礎知識習得のため的小テスト実施 「2年次」 ・各学生の担当樹種を決定する。各樹種の管理作業を行う際は目的、方法等を担当の学生が他の学生に説明する。 ・プロジェクト学習の課題設定、進行管理等を徹底させる。	1 「1,2年共通」 各学生が担当樹の管理作業を最後まで責任をもって行うことが出来た。 2年生は、2年目の管理となり作業の正確さやスピードが向上した。 【理解度アンケート】 できる以上の割合：1年：77% 2年：96% 「2年時」 ・担当樹種の作業内容について、作業時期ごとに目的や方法の説明を行った。学習チェックシートを活用することによって回を重ねることに発表方法に改善がみられるようになった。 ・プロジェクト学習は、各学生が主体性を持って取り組み、全員(2名)が中四国ブロック代表として全国大会に出場した。	A	・教科書として「因伯の果樹」を用いたゼミナールを月1回実施する。	
		2 新技術、新品種に係る技術習得	2 本校では、新技術、新品種を積極的に導入し、生産体制が整いつつある。これらを活用して生産現場の現状や将来的ニーズに応じた知識・技術の習得を図る	2 学習した新技術について理解度を確認するテストを行い全員が70点以上	2 ・新品種研修会、ジョイント仕立て研修会、現地視察等の参加(4回程度/年)。 ・参加した研修会で学んだ技術を本校の新品種、ジョイント栽培樹等で実際に行い、知識、技術の深化を図る。	2 島根県農業試験場の視察、県園芸試験場のセミナーへ参加し、校内の実習やプロジェクト学習の参考となった(2回)。 1年生は、県園芸試験場において実習を行いベテラン作業員から指導を受けた(1回)。 2年生は、農研機構果樹研究所(つくば市)で5日間の研修を受講し、最先端の技術を学ぶことが出来た(1回)。	B	・ロボット草刈り機や電動ばさみを導入予定であり、省力化、負担軽減効果を調査するなどスマート農業に取り組む。	・スマート農業には全てのコースで取り組むのか。学生が興味を持つ内容であり、きっかけを与えたら自分自身でも調べたりする。
		3 GLOBALG.A.P.の取り組み	3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。	3 ・リスク改善による適合基準達成割合：100% (認証継続)	3 ・生産工程におけるリスク点検、評価及び改善策について前年の取り組みの改善を図るとともに、新たに追加する事項の有無について学生を主体にしながら検討する。 ・全ての日本梨ほ場及び関連施設で活動実施	3 学生が主体となって、リスク点検、評価を行った。併せて前年の取り組みの改善点も抽出し、対策を実施した。 認証審査は12月3日に行われた。学生を中心に対応し、継続認証を取得した。 1年生は入学当初から整理整頓された状態の中で生活を行ったことにより、ごく当たり前のこととしてGAPの取り組みができるようになりつつある。2年生は、2年間のGAPの取り組みを通じて、GAPの理念を学ぶとともに人の意見を聞く重要性や自身の意見の述べ方、問題の発見方法など社会に出て役立つ能力を身に付けることが出来た。	A	・パソコンなどを用いた効率的な記録管理の手法を検討する。	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
		【野菜】 1 栽培基礎技術の向上とプロジェクト学習による実践力の養成	1 コースの学生15名のうち、農業高校以外の出身者が9名(60%)、また、非農家の学生が14名(93%)を占めており、農業に関する基礎知識及び技術の習得支援が必要である。 将来的な独立就農の意向を現段階で8名(53%)の学生が示しており、実習のレベルを個別的就農目的に合わせて充実させることが重要である。	1 ・理解度アンケートで、野菜に関する栽培基礎技術に関する項目について「できている」以上の評点が80%以上とする。 ・経営計画書作成 1年次：1品目100% 2年次：2品目100% ・農業技術検定 1年次：3級100% 2年次：2級 60%	1 「1年次」 ・1年生2名を1組として、ビニールハウス1棟の管理を行わせる。 ・各自の関心により、一人2品目を選定させ栽培管理を行わせる。 ・鳥取県の主要品目である白ネギ、トンネルスイカは1年生全員で管理を行う。 ・各品目のポイントとなる管理時期前に小テスト等を行い、基礎知識を理解させる。 ・経営の手引きを参考に経営計画書を作成させる。(担当する1品目) 「2年次」 ・各自の進路事情合わせたプロジェクト課題に対応した品目を担当させる。 ・ビニールハウス1棟を管理させ、播種から収穫終了までの長期的な管理計画を立てさせる。 ・栽培管理に使用した全資材、労働時間をリストアップさせ、経営計画書(資金繰り計画)の作成を行う。 ・1年生に適切な指示ができるように、2年生は1年生のハウス管理の補佐を行う。	1 「1年」 ・学生全員に最低1棟のビニールハウスを担当させ、責任をもって管理ができた。 ・病害虫の対応方法、肥培管理、生産物の値決めまで興味を持たせることができた。 ・経営計画書を作成することで、経費(肥料、農薬、資材)の重要性が理解でき、プロジェクト計画に反映できた。 【理解度アンケート56%】 「2年」 ・進路または、就農時の品目をプロジェクト課題に選定したことで、経営試算の内容は1年時と比べ、現実的(面積、労働時間、資産)なものとなった。 ・概ね、1年生に適切な指示が行えるようになった。 【理解度アンケート94%】 ・経営計画書作成 【1年：50% 2年：85%】 ・農業技術検定 【1年：37% 2年：14%】	C	1 ・非農家、農業高校以外出身者が多いため、1年生は1学期中に野菜ゼミにより野菜栽培の基礎知識を習得させる。	・経営計画を作成する品目でシロネギ、ブロッコリーは人気がないようだが、就農に向いている品目。
		2 県内先進農家、先進地及び試験場視察	野菜コースでは、現地の新技術(管理、品種等)を積極的に導入している、また、産地課題の解決プロジェクトに取り組む学生もいるため、現地の栽培管理状況を理解する必要がある。 さらに、現地ではスマート農業の導入が進むことが考えられ、新技術と併せてスマート農業先進農家の状況も理解する必要がある。	2 理解度アンケートで、鳥取県主要品目の現地状況について「理解できる」以上の評点が80%以上。	2 ・鳥取県主要品目を中心に先進地視察を実施する。 想定する品目(白ネギ、ブロッコリー、スイカ、トマト、ミニトマト、ホウレンソウ、イチゴ)	2 ・スイカ：生産部指導会等に参加(交配前管理の巡回指導1回、収穫前の圃場視察1回、査定会1回) ・イチゴ：高設栽培、ICT活用したスマート農業視察1回 ・白ネギ：弓浜分場にて、夏期管理、有望品種について1回 ・ミニトマト：肥培管理について助言をいただき、プロジェクト計画の参考とした1回 ・先進地の作物の管理状況等を実際に見ることで、自分のハウスの管理との違いを理解することが出来た。 【理解度アンケート：82%】	A		・生産現場の視察はもちろん重要だが、市場や量販店等の売り先の声を聞くことも大事なことです。
		3 GAPの取組	3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。	3 ・リスク改善による適合基準達成割合：100%(認証取得) ・理解度アンケートでGAPに関する項目について「理解できる」以上の評点が80%以上	3 ・生産工程におけるリスク点検、評価及び改善策を検討する。 ・秋冬ネギ圃場及び関連施設で活動実施 ・毎週金曜日の専攻後に、各班で検討した改善策を実行する。	3. ・リスク点検、評価及び改善策について、1年2年生とも点検、評価ができるようになる、改善策も学生ができること、学校がすべきことに分けることができた。 ・秋冬ネギに限らず、他の露地品目、ハウス作物についてもGAPの考え方に従い、衛生管理等が徹底できるようになった。 ・資材等の配置が決まったことで、道具を探す時間が激減した。 ・秋冬ネギで模擬審査を実施し、概ね合格となった。 【模擬審査 合格】 【理解度アンケート 78%】	B	3 ・R2年度に秋冬ネギでGGAP認証を取得に向け、前年実施した模擬審査で指摘のあった項目(肥料・農薬の使用量確認、調製室の使用方法の厳格化、産廃置き場の整理等、堆肥舎排水路整備)を改善する。	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
		【作物】 1 水稲栽培栽培基礎技術の向上と農業機械操作技術の習得	1 約半数が非農家出身であるため、水稲の基礎栽培技術を圃場管理を通じて習得する。 水田作ではトラクター、田植機、コンバイン等の機械操作が必要であるが、操作未経験の学生がほとんどである。 【参考】平均耕耘時間 H29：49分41秒 H30：34分42秒 7名中6名が50分以内	1・理解度アンケートで水稲の栽培に関する評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。 ・理解度アンケートトラクター、田植機、コンバインの操作に関する各評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。 ・耕耘技術競技の実施 50分/10a以内が50%以上	1 各学生には圃場1筆を責任をもって管理させ水稲栽培技術の習得を図る。特に2年生は、プロジェクト学習等により星空舞等の新品種やスマート農業など現地で必要とされている新技術の習得を図る。 学生の機械操作技術習得を図るためには、実習量を多くする必要がある。そのため、農大の管理ほ場面積を維持しつつ、近隣農家から機械作業実習ほ場の提供を受け、水田での作業面積を確保する。また、トラクターでの耕耘技術競技を実施し、技能向上を図る。	1 ・各学生は担当圃場を責任をもって管理することができた。プロジェクト学習について学習し、課題解決の手法を学ぶことができた。 ・スマート農業については、プロジェクト課題や関係機関が開催する研修等にその都度参加し、知見や技術の習得を図った。 【水稲栽培理解度】 100% ・近隣農家からの圃場提供を受け機械実習作業が自習できた。また、作業を実施する上で作業の方法、意味等を自分で考えさせ実行できるよう取り組んだ。 【機械操作理解度】 79% トラクタ耕耘作業については2月下旬～3月にかけて実施予定。	A B	・スマート農業は導入農家の見学や研修等を通じて技術習得を図る。また、圃場管理や水管理システムについては本校で、技術の検討を行う。 ・作業実習において、圃場ごとに作業方法等を自ら考える力をつける。	・稲作の大規模経営体は作業不足で、即戦力の確保先として農大に目が向いている。しかし、農大卒業生を雇用したある経営者から「基本的な耕耘作業はできるが、応用がきかない」、「作業をするだけで、その後のことを考えていない」と聞いた。近隣のプロ農家の技を見せるなど状況に応じた作業の仕方や作業の意味を理解させて欲しい。 ・先を見る力、想像する力、段取り力などを身に付けて欲しい。 ・今話題のスマート農業や新品種「星空舞」など新しいことに取り組んでいる。しかし、農業は感が頼り荷なる。先進農家などで感の大きさを学ばせて欲しい。
		2 有機栽培技術の習得	2 有機栽培に漠然とした興味を持って入学する学生が多いが、具体的な栽培管理は未経験である。	2 ・理解度アンケートでの有機栽培技術に関する項目で「できる」以上の評価が80%以上。	2 有機栽培技術導入ほ場を設置し、栽培技術の習得及びメリット、デメリットの理解を図る。	2 ・有機栽培圃場を設置し、栽培技術の習得を図った。プロジェクト学習でも取り組み、メリットデメリットを把握することができた。 ・有機、特栽培農家への視察研修で栽培技術の習得が図られた。 【有機栽培理解度】 100%	A	・本年度、雑草が多く改善策を検討する。	
		3 白ネギ、ブロッコリーの栽培技術習得	3 法人就農を目指す学生も多く、水田農業の複合経営で取り入れられることが多い白ネギ（秋冬）やブロッコリー（秋冬）の栽培技術の習得も必要。	3 ・理解度アンケートでの白ネギ、ブロッコリーの栽培に関する評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。	3 白ネギ（秋冬）、ブロッコリー（秋冬）を栽培	3 白ネギ、ブロッコリー等の栽培技術を一連の作業を経験して習得した。特に白ネギでは播種後の管理、培土作業が重要性が認識できた。 【栽培理解度】 88%	A	・白ネギにおいて水稲後の排水改善対策に取り組む。	
		4 GAPの取り組み	3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。	4 ・リスク点検及び改善箇所（置き場表示の改善等） 1か所以上	4 講義で学んだGAPに関する手法を実習の中に取り入れ、リスク点検及び改善活動について、学生への意識定着を図る	4 機械作業の安全性と正確性確保のため、機械の作業マニュアルを機械、アタッチメントごとに作成し、コース内で学習した。調整作業では、リスク改善と効率性を考慮した配置等を検討し実施した。物品の置き場所に着いて、表示を徹底した。	A		

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
		【畜産】 1 家畜（牛）の繁殖、生理に関する基本的知識を踏まえた管理技術の習得	1 畜産コースにおいて、学生10名のうち、農業高校以外の出身者が8名（80%）、また非農家出身学生が8名（80%）と多いため、まずは牛に慣れ、基礎的な知識・技能を重点的に習得させることに力を入れている。	1・理解度アンケートにより、牛の発情行動、健康状態のチェックができる以上の評価80%以上を目指す。	1 牛舎及び放牧場等における牛の発情行動及び便の状態などを継続観察させ、健康と異常とをチェックできる目を養うことにより、発情の発見率の向上、病気の早期発見など生産性を上げながら健康に管理する方法を習得する。	1 ・本年度「畜産ゼミ」を14回開催し、基礎知識の習得や技術の向上を図った。 ・牛の管理における「理解度アンケート」「できる」以上：7月20%⇒1月80% 基本的な牛舎作業、発情発見や異常牛の早期発見ができ、牛の観察能力が向上した。 ・2年生2名とも人工授精を実施し、既に受胎を確認している。	A	・2年生のプロジェクト内容を1年生が理解せずに関わっていることが多く、技術の継承がされていない。1年生が2年生のプロジェクトに積極的に関わられる流れを作る。	・朝の牛の状態など、2年生が1年生に説明し、牛の変化に早く気づくことができるようにしないといけない。 ・牧草を刈るタイミングは天気を見ながら計画することが大事。 ・和牛は女性でも飼いやすい。女子学生が多い中で、和牛の強化を。
		2 家畜管理用機械及び飼料作物関係機械の操作技術の習得	2 畜産関連業種又は農業法人が本学畜産コース学生に求める人材とは、家畜（牛）の基本的管理技術及び畜産の管理用機械（ホイルローダー等）、飼料作物関係機械の操作技術を習得した人材である。	2 ・理解度アンケートにより、コンプリートミキサー、ホイルローダー、搾乳機械の操作が日常的にできる。マニユアスプレッター、ロールラッピングマシン、コーンハーベスター等の操作が1人でできることの評価。 ・大型特殊・牽引免許以外の免許（小型車両系建設機械、フォークリフト等）将来的に必要とする者の取得者割合100%	2 ・①飼料給与・調整、②牛舎内の糞及び敷料の搬出・運搬、③糞乾燥機械の操作④搾乳作業等日々の継続した飼養管理の継続実施を図る。また、⑤飼料作物関係機械（堆肥及び肥料散布～収穫・調製作業）については体験実習を実施する。 ・就農就職先での作業に対応できるよう、必要な免許を取得することを奨励する。	2 5月：イタリアン牧草収穫 9月：トウモロコシ収穫、イタリアン播種作業 ・学生が中心となり牧草ラッピングマシン、ホイルローダー、大型トラクター等の農業機械の操作を習熟した。 ・機械操作における「理解度アンケート」「できる」以上：7月20%⇒1月70% 本年度技能講習等受講歴 ・小型車両系建設機械運転業務特別教育（職員1名） ・車両系建設機械運転技能講習（学生1名、職員1名） ・フォークリフト運転技能講習（学生1名）	B	・将来的に必要とする者に小型車両系建設機械運転業務特別教育の受講を促す。	・畜産では小型ホイルローダーは必ず使う機械。事故が起きてからだと困るため、小型車両系建設機械の資格は必須とすべき。 ・資格等の必要性が理解できるような説明をして欲しい。
		3 牛の繁養、誘導技術の習得	乳牛及び和牛の共進会が地域あるいは県域で開催されるため、積極的に参加をする。	3 各共進会への出品頭数（中部酪農祭1頭以上、県共1頭以上）	3 乳牛および和牛の共進会に参加を目指して飼養管理技術の習熟と育種改良の面についても充実を図る。 また、2022年10月に鹿児島県で第12回全国和牛能力共進会の開催が予定されているため、現段階から出品牛の誘導技術や飼料管理技術の蓄積、計画的な交配を行う。	3 6/22：中部酪農祭（乳牛1頭出品）2席入賞 8/29：中部畜産共進会（和牛1頭出品）2席入賞 10/5：県畜産共進会（乳牛1頭、和牛1頭出品）乳牛4席、和牛10席 3/18：B&Wショー出品予定（乳牛1頭） 共進会出品を通じ、牛の調教技術、削蹄技術、毛刈り技術、飼養管理技術などを習得した。	A		
		4 GAPの取り組み	3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得をとおして、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。	4 牛舎内や牛舎周辺環境整備や資材整理の徹底	3 生産工程におけるリスク点検等について理解を深め、可能な取り組みから改善活動を実施する。特に、整理整頓清掃（3S）に重点を置く。	4 ・搾乳室の洗浄手順を写真入りで作成し、搾乳室の壁に掲示した。 ・牛舎周辺の不要（腐敗）ロールの廃棄を行い環境美化に勤めた。 ・1日2回の餌槽及び水槽の清掃を徹底を図った。 ・飼料庫及び器具庫の整理整頓を実施。	B	・GAP認証取得を想定した作業手順書を作成する。	

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
5	学生の農業機械操作技術の向上	1 大型特殊免許とけん引免許の取得	1 就農や農業法人へ就職を目指す学生にとっては、トラクター、コンバイン等の大型農業機械の運転操作を行う上で大型特殊免許の取得が必要。また水稲・畜産関係へ就農や農業法人へ就職を希望する学生は、けん引免許の取得も必要となっている。	1 ・1年生の大型特殊免許の合格率(100%) ・1年生のけん引免許の合格率(90%)	1 試験日までの練習期間が限られているため、練習日を計画的に設定する。(練習は、効率よく交代を行い1人当たりの練習回数(乗車回数)を十分確保する) ①大型特殊免 6人/日、練習回数4回～5回/人 乗車回数16回～20回/人 ②けん引免許 5人/日、練習回数8回/人 乗車回数32回/人	1 ・1年生の大型特殊免許の合格率(86.9%) 23名中20名合格(学科試験不合格2名、実技試験不合格1名) ・1年生のけん引免許の合格率(100%) 15名中15名合格	B A		・昨年4月1日に行われた道路交通法改正の中身について、理解させて欲しい。
		2 農業機械の操作技術の向上	2 卒業後に就農又は農業法人へ就職する学生は、刈払機やロータリー耕耘の運転操作は必須であるが、操作の苦手な学生も見受けられるため、当該学生のレベルアップが必要。	2 ・確認試験の合格点達成率 草刈り(80%)、耕耘(80%)	2 農業機械の取り扱いに不慣れな学生に農業現場で使用頻度の高い、刈払機及びロータリー耕耘について補完的に追加実習を行う。(指導対象学生は各コース担任と相談の上決定) ○刈払機(10名程度) ・重点指導期間(7月～11月)、実習(草刈り)5回/人 確認試験(実技)、習熟度アンケート ○ロータリー(8名程度) ・重点指導期間(7月～11月)、実習(耕耘)5回/人 確認試験(実技)、習熟度アンケート	2 ・刈払機については、各コース指導教員による見極め・指導により操作技術を習得させた(100%)。 ・ロータリ(トラクタ、管理機)耕耘についても、同様に各コース指導教員による指導により操作技術を習得させた(100%)。 ・本年度重点指導対象者はなかった。	A	運転操作のほか、機械の構造や取扱い方法の知識についてもしっかりと学ばせる。	・農業現場では圃場条件に応じていろいろなハンドル型の刈り払い機が使用される。それぞれの型の刈払機が経験できるようにした方がいい。
		3 農業機械の点検整備技術の向上	3 使用する機械の操作技術の習得のみならず、その点検整備についても基本知識の習得と技術の向上が必要である。	3 ・確認試験の合格点達成率 知識(100%)、実技(100%)	3 使用機械の構造と点検整備の手法について学ばせる。 ○取扱説明書の重要性・点検整備の重要性を認識させる。 ○機械の取扱説明書の熟読、頻繁な目通しによる知識の向上を図る。(試験) ○機械の点検整備(日常点検・定期点検)の反復による技術の向上を図る。(実技・確認)	3 ・取扱説明書の重要性・点検整備の重要性については、全員が理解した(レポート提出により確認)。 ・点検整備の実技についても、各コースで選定した主要使用機械について、取説をみながらではあるが全員が実施できることを確認した(実技確認)。	A	点検整備の知識のほか、機械の構造や取扱い方法についてもしっかりと学ばせる。	
		4 農作業安全意識の向上	4 農作業事故を未然に防ぐためには危険箇所、危険行為を事前に予測、把握することが重要であるが、学生にはその意識・知識が乏しい。		4 農作業安全の授業を設定する。また学生の事故防止の参考につながる啓発資料を作成する。 ○農作業安全関連授業の実施(2回/6回) ○校内危険箇所、行為を把握し、農作業事故の減少に繋げる。	4 ・農作業安全講習の授業を2回実施 校内危険箇所、行為について、各コースでグループワークし、リスクを共通認識できた。また、安全作業のため各コースで使用する機械について点検整備とその重要性を理解させた。 ・結果、校内での機械作業での事故、負傷は0であった。		専攻実習の中で、ロープ固定をする機会は多いので、農業機械の講義においてロープワークの基本を学ばせる。	・事故に繋がらないようにすることが大事。 ・シロネギ土寄機などの管理機を軽トラックに載せた際のロープによる固定方法(ロープワーク)を教えて欲しい。

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの提案・提言
7	多様な研修制度の運用と研修生のニーズに即した就農支援の実施	1 関係機関との連携による進路調整	1 アグリチャレンジ科は、農業に関する基礎訓練として定着しつつあり、各機関の就農相談においても、農業未経験者に第一に促す研修として浸透してきた。今後は、雇用拡大により経営発展を目指す経営体の育成とあわせた制度運用をさらに意識し、引き続き市町村、普及所、JA、担い手育成機構等関係機関との意識統一と情報共有を図り、研修生の進路調整を進めていくことが必要。		1 雇用就農意向の研修生の就職に向けて、研修調整員による研修生情報および雇用可能な経営力を有する経営体情報について関係機関と共有することに一層努める。	1 ・各研修生の背景・意向と研修進捗を踏まえながら、随時個別面談を実施。 ・各者がスムーズに就農に至るよう、関係機関を交えた打合せを重ね、現場を意識した就農支援を実施。			
		2 地域と連携した産地主体型研修の運営	2 先進農家実践研修は、就農予定地域での生産部等を主体とした受入体制構築が必須である。その調整には従前多大な時間と労力を要す中、6市町（鳥取市、八頭町、倉吉市、湯梨浜町、北栄町、琴浦町）で10件の研修を実施し、いずれの研修生とも就農（見込み含む）に至っている。運営開始から4年目となり、産地主導で研修を仕組む動きも新たに生まれている。	2 ・産地主体型の新規開始研修 3件	2 湯梨浜町（東郷果実部）、倉吉市（倉吉西瓜生産部）など、産地主体型の新たな受入体制構築の動きと絡めて、研修ツールとして先進農家実践研修が活かされるよう、関係機関との調整を進める。	2 ・先進農家実践研修を活用し、4名が研修を開始した。 →養成課程卒業後、北栄町で4月より梨・ブドウ栽培の研修を開始。 →6月から、スキルアップ長期研修より琴浦町ミニトマト生産部主体の研修へ移行。 →スキルアップ短期研修（白ねぎ）修了後、10月より大山町で白ねぎ栽培を主に研修開始。 →アグリチャレンジ科修了後、2月より北栄町でスイカ栽培を主に研修開始。	A		・農大の研修制度を知っている生産部がどれだけあるだろうか。周知も含め、話し合いや連携していくことが重要。 ・就農希望者は生産部には相談に来ない。先ずは普及所への相談。生産部まで横の繋がりを求めるのであれば、関係者の話し合いの場が必要。
		3 新規研修の周知	3 就農品目の栽培管理基礎を習得するスキルアップ研修は、今年度、4ヶ月間の短期研修を創設した。白ねぎ、ブロッコリー、ミニトマト、スイカの野菜主要4品目に限定し、年5回開講する。新規研修であるため、当面、周知の徹底を要する。	3 ・新規研修（スキルアップ研修のうち短期研修）の受講者 10名	3 各種機会を活用し関係機関への再周知を図り、就農相談時に適切に提示していただけるようにする。また、JAの協力を仰ぎ、募集時期をとらえた各JA広報誌への記事掲載を行っていく（研修修了後、研修生が各生産部に属することを想定）。	3 ・県広報誌や新聞へのお知らせ掲載を実施したが、短期研修の受講者は、白ねぎ1名であった。	E	・JAや市町村の広報誌を活用し、短期研修の研修生募集について広く情報発信していく。	
		4 新規就農の優良事例発信	4 本校研修を経て独立自営就農した方、アグリチャレンジ科受講をきっかけに雇用就農に至った方等、近年で様々かつ優良な就農事例が生まれている。今後就農を検討する方に対し、これら事例の情報提供は有効であるが、従前積極的に行えていなかったのが実状。	4 ・HPを活用した研修修了生就農事例の紹介 10事例	4 今年度、まずはHPでの情報発信を行う（印刷物として事例集を作成よりも発信が早い。就農相談対応時に必要な事例を提示することも可能。）。	4 ・HPに研修修了生の就農事例を2名掲載。 ・追加掲載に向け、記載内容等の確認作業を継続。	E	・就農事例の記事作成を継続し、掲載数増に取り組む。	
		5（GAP関連）研修拠点施設の適正管理	5 農業学習館は、スキルアップ研修野菜専攻の拠点施設であり、栽培管理に係る資材・小農具・出荷資材・各種工具などを保管するとともに、毎日出荷調製作業を行う場所として活用している。日々の整理整頓の徹底について、自営開始を志す研修生に意識付けしていくことが重要。	5 ・誰にでもわかる収納への改善と表示の徹底化	5 改めて、農業学習館内の点検を研修生とともにし、作業性を考慮した物品の配置と、わかりやすい収納のための表示の徹底を行う。	5 ・作業場の物品の配置、道具類の分類を研修生と再点検し、損壊した物品、不要なもの、の廃棄や整理整頓を心掛け、効率的な配置の検討など、研修生が就農時に実践できるように取り組んだ。	A		